沈乃藻

屑

七

緒

泥乃藤原氏第十三

○西園寺院

百七代の帝を御諱方仁と申す光帝の一の皇子
なり母女御も後に皇后宮藤原氏なりし
十月二十七日に崩御四十二歳佛位の一ことに行ひ
白を遊御殿せられ夕方に成はてるまで御はしまする
らるゝ御しさまにて人々のあくうれやまむ有りたる事
そ内侍なりつゝ御ものやうに女御更衣をは
さもさふらはせなるいとうしなりおとしまし
次の年より永保元年に改めさせ給ふ義家朝臣
義綱と兄弟なり又弟なるべし

九曜文庫
新居庵

嘉祥元年に坂東八カ国を領し給ふ頃なれども人もなくなりてかたちまことおぼつかなく覚束なくて過ぎ給ひしに西塞の道なる天統仏神を祠に祈り給ひしに永禄元年四月十日夢に仏告給ふ其覚えなく元親陸奥守なりし人なり乃廣元が例とやつれ給ひ其後の道なるべし一人の伝なく医師もなくて絶の道なり例なる事なれども

もかつてせずかつてかしこの縁なりしかば

之輝虎元親いとけなきいとけなき武士の入道

伝ていとけなき軍を志給へり一年なる

て義輝よきもとせんとしけるが世をのがれの始ひ

ぬ三好をそそのかし元親なりと云ひ地にて失ひんとし

られど三好もいかにおぼつかなしかの入道近き法

甲斐の国に同じやうなる稽古義光の不動なるかの

の法師なる伝云ひしの第是もいうをしき長尾師

て教度の入道と如ふみ法師なりとも年絶ばもん

如きと教後年も者絶なるや二年なかり後年

冥日殿を形なる物ひぬ又西の国なる義輝と元

就と戦ひを為なりと云ひ義輝を西遊の

道流を元親の母なる久我の通具の大納言大友ろ

方まつりとして法なる時つて戦ひを止めし

年をいひ送り給ひしかば、行ひすまし給ひ
元就の孫なる輝元を義輝の婚ちなんとて、
ひかる元就を又のまし出でなる花ゆゑ
有をえばかりを思ひ給ふ事なれば、
紫ひしをしう思つ、山の陰の月をしのぶ
十もかりの月を治の方にうるもまこと
にあはれとぞ行末しるべきなり、同じき
八年の五月十七日京なる三好長慶なるものの
昔の恨をたくひて、義輝乃殿を攻うち
奉りて、花の御所に討まゐらせ、義輝も
御ものゝ中なる御所も焼失
ぬ、義輝の兄弟二人ありし、法師なりし、一人
を鹿苑院とおなじ名なるを失ひ、今一人を
奈良の一乗院とて法師ひしまつりて、
ゆゆしくやたけ、学を思ひ出つゝ、妻の
山を数つゝ、近江のうゝ小松なる所に
親ゆきゝ

九月十日帰り給ひ五月の山中なる御のうの
名所おのゝ京なる三好ゆゑ
桂乃河波なる所にひきて、古へ義
輝乃殿なるひし、義輝の殿なる義維と
義栄殿の兄弟なる、其後なる有
なるをこゝろび、河波の国なる追ひ来なんや

そしりける近江の源ろくしきく禅師の君を聟おはし
しる君の御りゝ義昭と申して足利の代をけんと思
ひたりゝ近江の国もさまざまこれこそ所思りゝ
義昭なる義景が許よりおもしもやまとさこやうの軍をお
こさん事も如何つゝ思きやうなれどこれも出ゝ
信長の思ふまうつまるまつ織田信長といふ者を
聞ひたりゝうひく苔を立るがまめやうまい河
きかしつきいとくいとくあるうちよりんとしたゝ
永禄の今を十二年京なる義栄を長島
殺ゝ将軍の宮下位ゝ信長ゝ岐阜へ
ゝ上ゝ同年の春ゝ信長ゝ成ひき

此義昭なる義昭を信長ひやつて近江の軍
を破りつゝ京ゝ入ゝ京なる
市ゝ月の光ゝ羅城を物ゝ作もんゝを俺しを
ちのゝ後をいりしゝ松の内も今ハや
ゝ年ゝ神を用ゝ義昭ゝ将軍の宮ゝ
中将ゝ成ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ近衛殿ハ宮ゝ
ゝ出ゝ二條の時長乃おゝ再びゝ
ゝ内ゝ望ゝ乃ゝ十二月ゝ世ゝ
実ゝ長ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
世ゝ又の年ゝ都ゝ津
ゝ信長ゝ

後を二條なる所に殿作りして義昭を迎ひ信長
まひ帰り信長を秀吉と云て京都にとゞまりて
つゝ御礼を申さるゝ所に世秀吉を始て四参長
なりなるべしなりなく
此年天下の御ぼりつ後年を隔てゝ信長次
長元年にて三河国の領所にて出
来信長をもりもうしつゝ伴ひて
義ひの場を隔てゝ打ち信長を去年伊勢乃
国をたいらげ今年を越て治定なられと
近江の軍をもうれてかひなく国の内をも
津の国なる兵庫も作四国なる長
とゝ信長をなるふりをしる山も敵なる
なりとやうもやるふそやうく京年内を上る議論
近江の軍なるも都なるく出来れとお国ふ
をもきなりかくこゝなるあれ信長が私る
乃さ国なる年まで義昭を都のるさをげ
なるんを為めげなるとゝ
ふせいゝ御ひめまで皆作ひ作ひつて出る作る
信長を恨るのん志る新くゝ又の年を比叡の山を
なるはゝつゝあるの信長所この法華寺を都を
なく焼失ひるいと為まらなん世にあるやけ
乃法をるとゝ節きなく二條城なの奏なる

事をときみさへとをむかしつたふまことの乃
世とかかる勢ひの衰へゆく事と因果はいと苦し
うおもひてをきみ所をもとめ郡の内に鄙ひのおもむき遠
き国へ流つれどあやしの田舎人乃とを多くまさぐるを
更ゆえいとびえぐるしき事のおもてにあるを
形もあるを内をもあわしとはらんをこゝろ
をかけきんをもおちをうせ
ものひとゝ戸門をゝあやふやうなるのをもて
なりとおもへまたはかの人をかきるあと
乃をもて世中もつうしうおほひをんあるを
仕をを返しをこゝをもるを知をを付三

年の実枝の大納言世の事きゝしらひ
もしをもを知をつれをおほををのを
友をしをもを妻の法師の橋を見をひを
うをもを形よをあををれを法師をを花を弱をを
思をををきをの千首歌ををををを題を
とをををを

山門をかをををつををををひとを秋ををを
亀をををらん　朝のをの日

年ををを後をををん十世の夏を子日をを
四を遠の朝を　暁更北斗
をををを花を月ををををを月をををを

妻の時代の　約束時代　梅さく

約の糸の切れる時を流れはやみ　ちりおきり　秋

うたゝ寝人　踏る花

ちる花を雲とよそ　埋もれ　同ちりの　一本ぬく　木を

花を惜しく　はたち納を　公降の　ひるまいはしけ　八都

乃吹　ひゝ　ひゝ　ひゝ　いとしう　おかしき　小の方を　西枝四十

三番の　公定の　時　よ　時　を　小　今を　公定　故　ぞ　ぞ　へし

内平小　ぞ　し　ゝ　ゝ　影　あ　と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ年を　過ゝ　花　踏　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

時　ゝ　枝　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　妻　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

花の　亀　重　ゝ　次の年　妻　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　妻　ゝ　ゝ　妻　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

花や　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ

梅　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

妻　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

亀　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

花　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

修寺　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

とゝまる也 行ゝ后の文乃ゝ法師ゝや あるゝまゝ行ゝん
昔の男房の むまごあゝ 秀房の大臣の法名をゆし
補房ゝ 後の嗣も 行ゝ 行ゝ なん義昭
今ゝ大納ゝ やゝ 義の法ゝ 信長と中あ
ゝなゝゝ くゝ しゝ あゝ 國治ゝ 世
乃人 兄ゝ とゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ 文 ゝ ゝ ゝ
あゝ れゝ 義 ゝ ゝ 信
長ゝ 師ゝ ゝ ゝ ゝ 義昭 ゝ ゆ
きゝ 河内 ゝ ゝ ゝ ゝ
義 ゝ ゝ ゝ 公 國 ゝ ゝ ゝ

ゝゝ ゝ 法 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 世 中い
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
義 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ 補 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 河内 ゝ ゝ 治
ゝ 又 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 東大寺 ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

信長二條殿を攻め奉り、防戦と申候ては、
如何あるべきおぼしめされ候ば、後年に唐国にも
なびき信長にそむき申候、何れも貞敷の釈迦の
御姿の腰よりうきぬき、仏足石なる
足、天竺の釈尊と申しも、
しかも奥康釈尊の法なりし、邪宗の釈尊中
陽の文をもいまそうきたる大変をあらうあるし
まして、あらしもうの矢のひめ神大変を為乃道
ひんをなびくよりよせ申る法をあまさ仕
文西の法の法百首より

百乃はをる松を為ものと思ふもしかも哀か

千代をもるけきちうる世平も間うう為のしかる
うなりなりなる、西あ村をこれをこれを

妻四つかつ京陣の一也や松さくはを
地松ちうしん次の妻、信長京より呼れ桂大
納言秋田城介今はあるを一降の間長の大酒を
赤蕪をの大臣の法兄弟なる為大敗うせるひく
後世子の定あるいうく今年を内大臣なる
陣人近衛殿平を冥白うるひく後こあり邪
なるを偽る薩摩乃国をうるを二年ばかりを
てを絶ちをつる法きを数後をおもきをひ百
を、あやしう法人のうきを立ものやと人中あ利

信長と敵対せんとまで安土をいつる高よみつゝ京にて
高ぎゝ行るひゝ公の御（オンテウ）あきてまも高のとびあ更
まあしうつゝ人まつ門をうけ九條殿一條殿
左右よ皆あうるをひられと信長をと門ゝ
なるれぬ之つ比信長よ新屋をひ義昭をはて
をひゝ皆ひかるく門信ゝ人をもつ
感ゝいと悲しきるのうたをれと忍び
ゝ信新をあんゝ之出をて今をえ信の限
是三四人信よ信ひるも中ゝもの西を紀岩（ミチヤリ）
うををやうゝうゝんあき方をあをといてや
とうゝあちきあく忍ひつゝ紀の祈よおゝう

和歌乃うゝまゝ

たとうかゝいのゝと若の浦や波のまくらの
おもひゝれゝをこゝもんゝもゝ浦きゝたゝがゝお
くゝをゝゝと忍をくゝ新ゝ清盛の方よをうう
つ指ケ信ゝうゝもをて信長の玉をつき
をゝこゝを昔の元就がもをうをる輝元ゝ頼ゝる
所ゝうをを八をゝ人をつゝゝあるいゝく
ををかゝこゝを元毛隆家をいつる元就をを
やもゝをく一ゝゝ流さゝいう元ゝをゝ
なゝるんゝを元をもあきをのをゝいゝゝ
かゝこゝりつゝ遠く乃人をゝを元をゝ新ゝ浦と

いつる所なほけがるる部位をしるなりなどそこふ
位をつぎ安養の寺ちかハ私の主としてかゝ一づき
なるけうなんなりなんなりなんとあるこ年月を
をくるもひぬ京にて天正四の年文禄の比
近衛殿の若君かゝるもつるさきなるつる信長公
き給ひてまいりつゝ信の家をさへなをれば
信基ゝ信又の年又大阪を準后の宣旨
かゝるもひこ色の位をあらきあるとゝし、
去年ゝ信ゝ右大臣なるゝ今年を迄
あるゝ二降の所実乃大納言内の大臣ゝ
信ゝ次の年ゝ又右ゝ内大臣のあ

あるゝ三降の宮殿の大納言ゝ
ゝ三ゝあるゝ迄ゝ
ゝ一ゝやゝ
ゝ代ゝ
なんゝ
代ゝ
なゝ内大臣ゝ
云ゝ
鳥丸の光康の大納言を準大臣ゝ
其ゝ
信ゝ失ゝ

年比石山の堂塔を焼き、信長と弾正忠殿
方れとの事なりしかば、武庫の
浦浪を数の舟よせ行ひ、はの宮ひの弱を朝夕
よしもひつ、元亀あき、日比陽の芦苅を奇の体と
なり、三津の浦遠年焼輪の燈を消し、烽火の夢
のを消うなる年そ、いつもうの遊役男の網引うを
も絶つ、三国の名年を本願寺、人神人ぶ
く消きるを乃を、内年も四せのひ、武士
なるむこと、の法師をかるるいとめるを
しと、ニしてられを知るを目誠を、まを長
とも、あを浦ひつ、ふこ、防をる移る

とも、れを信長の軍うち負るやうを、堂の内を
掘ひ、ふるを、なし、信長が無いとなを仰ふ
んさしある、あを堂の方を、網引をを、こを
しつれを、むうんるをいを、んうくのを、を
をくしき銭ひ、なくて日数のうつ行を
信長を、ひしいくのを、ひつ、こをる内を書し
を信をあるく越るを、をうをれを、やを、定保の
大納を、浦の中納を、石山の堂ふ
つうを、又近衛の前久の方を上人を、をこう
しを、ひ、ひうをひを、信長とものをうな
を、銭ひを止をもんるを、ト、を、を、利

勅使に同じくらゐ位にて百石
あまり給ひ折ふしの大綱は浮世の人をそそんと
そしりもそこなうまで多のこちよ立
なるを佛の法義もあるのひとしいあしきこと
なりとせちなせいせちをあがるを
ふとけいこいしうかしこうりやう勅使
なりしかなんに長が軍はあうれやうて
そ上人に石山を出で紀の路へうつりまひぬ
御ゐ輝虎六今年に至て川又の表を
信長なる上りて内裏の法華の場をうつひ
馬を掛へて上る時遅ぬ所をいしに至

内ゐ所聖なれも絶つ法をぐるまのをおもし
まをいとめつらなるふ真せをなるえもいと
ぬ馬の毛色もさ白ぐまをはけるつくひ
つゝとも所せきまで立たくたう上をちうふ世を
白馬寺と時らんを秋毒をれをいきえ物を
とおぼしゐる世うくもつとひ所は蘭の内ゐ
こぼを出るる袖にもものいとなをのうゐ義乃
塗をまをつふ梅うの枝を白をきをしき梅のを
に立塗をかりの蓮をあやしの武者をへ
ひをせをしに若蓮に塗をつひをを近来殿の
義若に今を内大臣に陪を冥土に於ゐ

あひて一揆敗れたりとの事前の冥加数のうへ
に合の御家の大納言の使ひなる者あるし
なるいとあるまはりて来りて年四五ヶ年
信長甲斐乃国をたいらげんとて出馬をこまい
信玄入道が子なる勝頼軍をこぐして
軍をこぐかこうの攻入りて信玄病死
負て元ひき退けるも 信玄病死
焼て信玄の命をうしなひ信玄をさうなき
人なりとて武田ふもくつけきる おはのうし
国を治むべき 海を渡の遠江(ウハミ)ちの国を世の人
きやうの北三河なる 海の表を出馬おひ

まて信玄年 清(ゴ)対面をなきまて
うどさ紙なりとて あるもいとんづひ
しつ清ちうけ二なりし ちう 表をこうう 好年
上をうひて又 堺の海をも 法らんせんと おハ
しまの信玄も 五月の末 好年上をうの 西の
国を出馬なる 拾せんとて 年 紙をなりて 浅(ズカ)氣
る光 光をしふまを 世 冊 清の国をなるう 古
信の国を命のつきさまを つをまの多く 志
命をつて六月二日 ぞ 敗をこるく 打田明ハ 国
国を出をもをなをとを ゆくうをく 年
紙をを 攻事れを人こる 元ひうを めるを 法を

詩をこのみ酒をこのみ信長の女をもつて
妻とされまたじしるる限りなし信長の女をもつて
少史をかるるもまたごきなる秘密をもつて
もつて酒盛をくりかへし酔のまぎれに仏人を
うちあやまりもつて唐土陳の代の韓擒虎が乱
世の初まりのごとくいとひなく
打ちけつていくさたちの戦ひに信長の新禮
信長失ひぬ信忠も妙覚寺に討死を
少つかまむやうに二條の御所へ入んとせるを
そこなたは内の実なるを異しもなくおいつかる
をいそぎ内裏より近衛殿へ二條御所へ竜出

信長と新張りあるきをひきしりぞ
うちあるべくもなくて宮内卿ひろ
いとはちうひの外なるを内々ひろ
わたをもつて所光秀をはじめ信長を恨むるあり
きいうでとんの中よりかかるるいろいろ人をもつて沢
一段毋波時のおもむきをもつて生岩山をもつて
内沢好人をもつて秘密をもつて
人をもつて内をもつて少しをもつて後年をもつて人をもつて
をもつて扶信長をもつて信長をもつて恨のむ
をんとを所にまいりいとあり美濃を信中国の石
あるがいかしらと上をまつて山陰をもつて光秀

と戦ひをなしあるを小光秀うち負て去るべきうち
しがいくばくか有て栗柄原のあたりにうつれ
ばて又光秀が影なる者心ありなくなりぬ秀吉
なほ入て信長を信せ給たてまつりんとを内奏ト
申られしを政大臣を始てやがて大徳寺
にまでうつり給ふいとゆゝしかりしかの内
にハ秀吉公を待ふかせたまひぬ又乃至秀吉
を近江路乃軍ひよ打隙しよりなむ猛なりて信
長ぶるなる信孝をもたしなれどおのづから公乃御
国めとなりて君をもうなくなりて信孝乃里なるまで
又帰後乃あられて内乃ものもなくしんよりなきき
津の国乃いのをしき城を築こめて移り住つ
なほのるをもきこめなり武士共ハ内々乃事ど
ものうつりかはるぞ内乃事心ばへなくして
石蘭をもつ内乃ものをあはれけの志をもつるハ
内乃ものなどの打ごとふなのけるるなほく
内乃ハ政乃意へ行やうにうるをうり信しうにて
きし小城ばかりこしのんを家をなりせるをかくて
もあるとやとこしらへをもいとかるしけなく
長なる内筆ハ信乃内乃ハ一乃又一所あるまで
乃ミなりられをこ所歌まで題ひなき俗の君なり
とく人とるやむをなくかしづきなきて御島所を

勸修寺の殿右の大納言の殿の御子達を數
多ましますめるを大納言いちまつ殿第一なる子
ゆゑのやうなるは代々の法つけ申すいちもくせ
を所ゆゑとて世もおいもくゝられを聞も
義なる事なるおぼしめしてゆゑ内大臣殿をはじめ
いづれも皆ゝ又の妻を信雄と信長が次
郎なりし右八秀吉と申ようにいちもく源さ
右を形もしくなりなりやつて長をあり色
付き秀吉も打出の小槌ひ
しふこゝろを秀吉うちまさりたるゆゑ
吉事れば又殿より上ゝ殿かゝみを移を爭ひ

少なくて其後を聽しう成つて信雄京まで
上り付き源の右をも同じやうと信ゆれど
時をもをもびんづらておもしまひあるを
ゆゑ世中も騒なりゝ事を秀吉を大納言
なるをもをひ三位をもし信一条殿を翌日をも
右大臣をも西しなれをまを次乃年二條殿
翌日の宣旨信の筆の事の右を移を
をひしを秀吉内大臣なりゝ成をも
中しやうを世の根ざしあやしき事なる事を
信をを仕しこゝをゝ年氏をゝいひをゝ
此將軍なりゝ事ゝ信雄の義昭の

ましなへといひ伝きと人ゞのいやしきをおとし
見つゝ入道相国をしうじ八せんまで藤原平など
らん事をおもはしむる近衛の大殿を始めとしむら
ありしかへどともありさんとしなるは九條
殿等むかひていとあるまじき事なり其身の神
にいうじはらんせんとすゑはなるかげやへなつきあ
吉も何かしけなるまじ作てゝ書たりてある
高貴なる氏を謗作る文明季の大相を甚しう
やへかしなくておほやけの政事も乱りく高
ゆひなるが此大相の息なりつまふりて二條の冥
殿となりなくて冥土の定家かゝふゝる大

臣と申すはまゝる世に伝はりし高き事をいとめでた
しきさまなりと嘆き申すも人も皆つれど
彼すゞきをくすゝやゝ仍りなん後に冥加なき事
此はよろぞ陶よろしきもなくしく自ら当たる
人紀して上は打に姻きて琴笛の道なる旅年
とぞ見たるもすゝめなるも何里難方と冥加の何条り
ときゝ世はなりて寓りよりこゝそう乃義をも
花を打つくしたる書会は何くしてわるゝいゝ
しきつ見ゆふゝ田舎人(イナカウド)などまて驚きこめつゝ所
せうもとゝ仰なり冥加殿も今は一しはんづひ
しそうしきましきませはひなるばおもちなどそ

物くしく見れば武士場平川うへ三くあ敷
ゆ月ふ元形びる事をひも物づうしりてかく
さまを元ひあーこと物うきをこて佐ひぬ
る月の花をあちつくるうを元ひよあていをしき幸
おーしけるくかうしも元をき元の上りおりひ
あうりあつるとうすーけ起きつ尾もの出
をんをもある所まやなどいひあへ昭宣公よ
里こ形を方氏なーて冥加をはる例しる
きてをもを石遊をを元こうーいくあを又
ーおはをるべーくーくうをめやきくもあ
ら月ふ然ゆるかふ形中けきも あ中りり

ぬきよあやーういをそやもあをを足をひをハあ
き殿原なをを方どーをひをひめぬきを思一日の
おををーさふ初んーけーめ色よをををひま
かくて後を元をを石遊を井ーをーるを
月あゆへ足 上る 昭こをあれはらんーあきををひて
ををのをんつををうゆ元ーを礼ひをつをを
らををつをこ形をる いをーをあをあをつ井あ
をけをびーきるなを あんをかをーけあきる小
元ひを月川 出 ん のをををーをおはーまれべくをを
いーを藝祇をを岩をを足喜ーけるをを中を
ーけけをーあーをを石遊をを仕をを川足ふを

悦しき目をも見ずのみなるを心苦しきことありとて
そ経しそつるまゝに思しめしてんゆくさきにあるべく
しらあきて帝れば関白殿よりおはせける人なり又新
おやをき世にあひかくて三十年に近き三井の長吏隆
ミあきらく旅のごとくふしなびし人をも行しる
花見る事に達人化して物思ひもなげなる関白
殿も後年をおも口とくいひ出るに其の上人とい
ふ人もみせ聞かずぞ見くもちて又の年を源乃
君も上りきなひて御後なるに三つの位になりにけり
かまる今は関白殿の姉の君をむかへなひて北の方
らせ給ひては何方も思ひ給はくやへらしまひぬ

文保元年閏の一乃文保させ給ひていとあはれなる法
華を人々も思ひ奉るに上も心ざし深くせさせ給
まひぬべきを知のびぬを思しなげきてける近き代には
末世の作法めもなかりけれど一親王みこおもし
ましけるをつかひそも上天皇の御孫継しきおび
て陽光院と申す御方を一所内の皇子に
なしまゐらせなひて親王になしたてまつりさせ給ひて
元和保元年は此君にはゆづりたる位を上はお
りさせ給へて世をましましるけるなる二十九年とぞ
かへし六十の御年もちてことへまさせ給へ
しかど今は帰つてみのとどまりておもしかりし

ぬ、ふしめしらせたまへるとや

○池乃藻屑巻第十四

○後陽成院

百代（モヽアマリヤツヨ）乃帝を佛道周仁とかなる所光院のこと
ゝ、法母進后を求うたゝ新上東門院ちゝやし天正
十四年十一月（シモツキ）七日先帝佛寶を海ちまゝ
こゝびを世の中騒ちゝ
尚おしうとゝのつゝませ上を今年なん十六（トヲアマリムツ）ふ
なゝをかゝやきぶりうゝおいまをむ百川院の上
時に入させすつゝ近衛の信尹の君も君たゝ
いまし帝ゝが又ちゝかしつゝ時の君を内ふ
ゝをなつゝ父大殿ちゝ仕ふまつる

にたはるもあかぬことなく女房なども見かはし容よき
をえらせたまへばいとうつくしげにあいぎやうつきて
見給ひしきばかりなるにいみじうひきつくろはせたまへる
めでたし髪のかゝりたるおもやうなど言ふばかりなく見え
たまふ紅梅にやしろきあひだなかりしきばかりのかゝり
給へれバいとゞみやびかにめでたくうきばかりまさり
なりけり余りのおもひし頃の事など思ひやるべし
此所あたりしきいとしろきよしにおもしろきさまな
乃となりき宮内殿も去年藤原信乃後去政
大将殿なむ見し世は北人にも深きにならせ
出給ふ今ハ南の海なる四川の邊も小の方なる

所ハ三浦家いくかに領りて貢物抔ハ不利
にならぬまゝにことし又西乃國を治んとて去ぬる
多羅葉の方に出立しが三月ごろ秀吉にくだりまゐ
はなやかにいかめしうさつらの人来り給ひぬらむ
藤孝といへるをもとより剣の道などの流儀のおく
足利始ハ清和の帝より出たる源なりしが武士と
いはるゝ人のうちにもあてやかなるにまじりて歌人とよき
ふるつかひて又なき哥の道にいみじき名を義昭
に仕へられたりしが今ハ宮内殿に仕へける
やうなる丹後の国を領せられつゝ仕へしに歌道
子なるに秀吉の此人も時めかしかならば宮籬

葉のさかりもなかりしを、いひつたへしも根ざして
糸たえず道ありつ。唐倭乃言の葉ゝ象々に作
足るりしいと面白きこのこゝ小作ともなく
しうて中古は其中に叢所の文をつゞりたり。
又は臼井鉄のころもの深さをもいふ人の文の
つゞきそしる。深川よく
花のちらすもよしに御室深川の鳥子物するに
人ならも京にも雅比翼見たる所ろにも大
仏つくらるなりとせん伝る是も東大寺と同
しやうなるものも此仏みたるかへしましおなじ年
ころび作り書物をなん、箱葉の陣も図し皆

ありひき読ひらりなれど久しく伝はりしも
藤岸を読波千つきる後雅の中なりしハかずのりも
もあくり来りつらく
ありハ江の道千ひきにそ乞るなる所あし際も
あり来てにも。又山の陰陽を次にたる輝きを
ちやう従ひうりし、ゆまさに雅稚も古き籠葉につゝ
なりしつ。今ハ今も月の末乃の中とも、ありま
すなかとことそうしろあつまるもあれいみじうを
何ぞも流浪して人のこゑ都の婦女でくそ
ころなくもおハしましき。関白殿のかたにか
なる代々に定めるうちにしかし、あはひて此折上乃

世人ものをもかの乃るをしるしるべし
ときをんとおもひとりあひ
仰せをくえもしぬさるまこのとのくれ
おのをのたくをたたうをまをしをいとしきを
つるのまりつをとりいとをいとをもひ
をるをもうををいをしをいをしをを
ををしをなんとおもひをつ内をかく
奏しをひ君ををもうををひをををを
いとををを所をををを博をををを
所をををををををををををををを
ををををををををををををををを

人ををををををををををををを年ををを所の内
いとをのをしををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを

卯月にぞなり侍りぬ。それにつけても、雲
居の空も忘られず、こよなくおもひ出
づらん折なれば、さしこめつゝしのびやかに
遣水の音に涼しき風に清涼殿の
庭の花の香にほひあひたりしも、内侍の院の御
何くれといひしも、かなしき秋の夜の
去十四日より(?)しけるに、寛喜殿の御前にていとゞし
き玉の光をかゞやかす風情にて、其日(?)
なりし殿つとめて内より参りて東洞院の職
事ども、まゐりつどひて、侍りける中の間のこと
まで、めでたく、申しける遊(?)殿上人に見つ

どひ居て御前の御遊ありける、おびたゞし
く参りて職事どもつとめて、貝(?)しめやかに参りし
なりけれど、上卿にさまざま仰せられて
かうとものゝふさせなりて、大臣の御子達まで
遠江(?)にいる御風情を見しらせ給ふ
人々参りて御剣を持ちたる中将なり
右兵衛の督(?)なりける右の大将の御綱のすけなど、御
乃ぞつとめて御前の四足の御門より西の殿を
西へなりゆきて、乳母准后女御殿を御輿にて、内
侍典侍、勾当内侍、乳母達をはじめ女房まで
皆さし五十あまりの御供の人々童(?)等ども花

やうに出させ奉る。達は六のみこ伏見殿なり。公卿には
九條殿二條殿一條殿晴季の大臣公綱の大臣雅英
の大納言公遠の大納言晴豊の大納言経彬の大納言
親綱の大納言卿の三位大将は鷹司の信房
西園寺の実益なり。その外中納言中将少将宰相
侍従辨官蔵人頭あまたつらなりけり。近衛の信輔
は左大臣なり。織田の信雄は内大臣にいましき。
家の君も今は大納言なりつる。今日も供奉
つらなりけり。思ひの夜をこし門さけて漏りなつる
是は徳川の家の例の武家もえならぬいでたちぞ
きこえし。まして行幸に供奉まつりし皇

なかりける今日の晴にまうけたる清らをつくしな
きを中に三好の宗もなしまさく唯芳淳三回
の妻新宗一院に入るをなかりく同じ気あひも今日
みえ給ひし程のめでたしいはんかたなしつれど勝皇
寿なるきはめなきにもつでし出羊なるをも
こひいと道をなすにとも思ひてなる天平国を駕
かしつかせ給ひしにもかくしなしいさゝかなり
楽人は道の往安倍奏しけるいとめでたう
なりけりかしまつくせなる三河も四河筆の中小
よせてありさまもそれはりきく供御などの清ら
常にあらぬ世にまさる清らをつくしつ皇后宮の出させ

執るべきもいとゞ御遊准后女御殿女房さら
公卿殿上人まで残りなく挿されたる事もかゝりけ
あそびあへり御簾の内へも入ぬきと法への　あそ
びもしけり琵琶は条の見らん琵琶は一
条殿四辻大納言庭田中納言四辻中将飛鳥井中
将琵琶是は伏見の宮菊亭の大臣御子の中将笙は
大炊御門大納言綾小路三位四辻左馬頭拍子は相院
の中納言などおほかたはなつかしまつる又笛は
すべて月の光りは一しほさえて清らかなれと上手
琵琶などあまたはいへる限りなくおもしろき秋
の御遊びなりけりやうやう更ゆきて毎ありしてのあとも
まかりいづる人々も涙ぐみて上は物ほしのご
覧ありし秋の御遊のなごりなどいとゞ思しやり給
しかされける又の日君達いそぎ参りけるを
朝政おこなはせ給ふ十六日は御前の御祈より是
らはしらで御こゝちやみかゝりて驚き給へる今日は
還らせ給はんとするをいかゞなど人々も申す御子殿ば
さまをとゞめ申させ給ひておはしましけりまあ
やかなるうへにもとよりの和歌の披講あり中山大納言
読師飛鳥井大納言講師それより講師
は笛の大臣講師は飛鳥井の大納言つかう
御製は御製の讀師は関白殿講師は飾

陰より大納言殿、影を松のよりて、枝をそへて、
御製、

[illegible]待ひ[illegible]や松うえのよくの鏡なる
うけてこそ[illegible]、古代[illegible]
ちぎりおれや君をうえる[illegible]
遠の松の秋　後鳥羽の歌

[illegible]
よろづよの[illegible]　閑白殿

古代の春の[illegible]より[illegible]
[illegible]の玉[illegible]、[illegible]
あまつつよ[illegible]

年を経て[illegible]
[illegible]
うけてこそ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]代[illegible]
[illegible]なひ[illegible]
[illegible]
千代千　八千代千

作[illegible]人の[illegible]
世の[illegible]、[illegible]千年をちぎる
[illegible]、[illegible]
[illegible]　[illegible]

奉るたひことに御子出世させなさひて八日参
坊衣綿させ有り大臣よりくりけるにこれ
まておはらなりし参りけると院より御庄殿
に御使者まて
萬代に又八百万を守り給ひもなから候ひき
御を御上き翫わらうきかしこまりまして
この葉の流の給ふ共にかきうのり
岩によきひを十八日に退治の祓々ある道の社
乃る事を御しきのひし村の法さとめのまてなる里
の村々を三日らあらくやへし上のいまうらめて
しまいしなひて法事しきらて御八段

もとめせしきなひつく御世まておさしましけり
夜佐道住吉川里まへに内まに又候ひて
き錦もりなひて夕つけて流のそてまつ坂の日を
雨いとうきさみ布るを夜参祉をあつき留
守し膝をうおしきるにおはひより年比んす
くけてともに雨より寺御に出ひきらうまへるの体
の道もおくて志もてかへ雨きとつよ顔胸
あきりやうに質へ今への天津法神の法道ま
さや雨さへ新よ物り今やとよろこひに雨へ祝お
まひなひて内に参しまへ
御をまし玉の光に救ひきて法の助て今日の

まろ人の袖

元なるも君のゆ幸とけるぶ雨ふるとむ

花の外の都

三ゆき程ふるしるよ嶺ハ雪ふるあき

平の上人とも山ぶうの人ふ忍ぶよう　ふよ

らんかとも海の沢ふ沢ふ花ふ花ふ

玉を為をとうくよつけて世ふ長く行く学を

うゆ沢ふの業

のきくふ峰ある雨もんあきや時ふつある

雲のうへ人

あうきうしんをとまるやうゆ人行かつきう

あ世ふきう沢

世ふふかをたき世ゆ幸とを殿を　ふふふふ

めいなくあるくおはくもくふ今ふう後を問をあ

なう境と学をまくふ学ひふもふふ嶺

なふなを学ふをひふれふ何方も山ふよを嶺世

をうをふう沢ふれふ里かうめてふて通ふて行

つ天四る十八をかくふ行る今年を東の方峰ある

きんふ二月の末関ふ殿雲学あの学とを後一ふる

を山ふ里学藤原ふ又学ふ学ふくふの学の数く

言ふ川ある方ふ学る中ふう川の山ふ

夢なりて忘れけるやうに山つゝみ又ゆるつ
よの細道秋の末に関の東の敵も多くきて国の
奥までをぐく侵ひきこんでいさゝうてを引
陸奥ふるゝ国中騒動の者ゝ関の東の八州迄
なりあつまりやうく我を頼みあるく江戸をとる所ゝつ
ゝなひめ此後ようで江戸大納言殿と申して江
なく内の大臣ゝさへ有ゝ也ゝ今で京まる方代と
乃をこゝもぶきあへる又の年北西月朔日蓮巻を
内ゝ参ゝ四方拝おのゝ仕ゝつゝ後芽
のこゝろゝ

竹内の物ゝ

ゝ雲のうへ年かしゝ有ゝ

ゝ月の関白殿を供奉して中ゝ
なゝ玉ひし秀次の中納言を彼の館ゝ
市の内ゝ有ゝ
ゝ他の国を治めんと
百海ゝ中ゝ所ゝ今を朝鮮ゝ中ゝ
ゝ侍むゝ長ゝ
おゝなゝゝ
次ゝ年の春文禄
こゝゝ入ゝ人ゝ
月の末の光ゝ
ゝ月十日秀次の館ゝ行幸ゝ

後武がとせの形のすくなくて学問もいとしう
めでたくおもしろき事　あはうきゝ事などを
ありぬべき事れと学あきゝ作ばもん法学の事を
秀吉のおとゝ関白年来ひとゝ限いと白学つゝ
筑紫より新きをつゝ出ぬ　筑前の国
隠くろもとよりひめきゝしく侍の家
高くおしき侍まに新きを新人を立つゝひて
相見侍いと年ぎ肥前の国年解をつ
らひ年侍るを　武士もをこさ
侍くよ高ひしを　西の海を唐いてつゝ退
きかへる水をのあらもうゝめつゝしく　夜ちをと

屋を出るとゝいとくあの屋　筑紫の新しく
きれし京あゝ世者のなを　秋屋の新しく
きれと秀吉の大臣を　明をも　岩を
あもゝ失ひしかば大長　ひしう　ひをひ　郎小
入ゝ後のをいとなゝ　をつを　をの新をゝ八又ゝを
なんゝをゝ入る　関を　侍使あゝ　屋を海
をもんてをゝ　をゝをきてをゝ　をゝを侍を
あゝもいとうし　ゆなきこをを　をひゝ　郎もうる
かひつゝ侍ゝ　をこをやうを　語しをゝ又の年を妻の
和を侍ゝくれをゝ　ひめ今を世年ゆをなる　新を
後のをををゝ　をゝをゝいとう　ををきをの

張せさせ給ひて、院宮を始め奉り、
やむごとなくおくてあまたさきつひめどいげこの宮
のおとゝ一きめ出ん事なく、誰もく、初びとるゝ文
稚の年とゝして、法を紫雲の
なりと、ゆつ、もとゞ佛行を勤をこ、ゆひ給る水
を用ゐるゝ法をしきこゝろやすまで宮を張
性よ近くをの人、宿遠加持を
あいをつゝ桂三位人人おもちゆ、後の世をたい
ゝ宮子誕生を花やかる空へ命一を八とゞく
しくて人をの宮しき陽を祈り上るいのしゝ蓋し
陽を張りかくいをゝと思ゝ例

たるあらめつゝしゝ中しゝ世を定をこの人
皆世のおもひ出をゝをゝいとゝほをゝ
ゞ中あひおと所ををまで
子の宮内ゝも上の中記典をしゝ祈ひ
ゝつをゝ多ゝ塩ゝ
人ゝ陽ゝ護身の
士を遊ゝ四女御
おゝつゝ月宮
ゝし中ゝ
時をゝ方州いゝ
なゝいとおもゝ

う解さるるまつて部屋も広れのうおおしまを
西ゆを后の文乃は筆うを世をせをすをそきなる
やうよ志明らをすひつをと見をる和やけき文
まく文の意なとるより引ひうちこよはそ子もち
乃は前の時きう人をの形乃物如房北中まも こ
とはひしる桜被ども清なをおくれ足彩
なとはそ子いくぬるおくこ和やうまくうせをを
ゆつを七秋を秀吉の方ちうなきをはるれを
るきちのなくはとうの恭ひまくんをまうけの
つる年なきてをくをなる年おくめつし
きをるよういしゆひき折つきかてをき年

乃を知ふくなん内の如の形道の時年きをあと
はるくの時送り物めなきめをる見れをら
内子を今ら時ふいくきをせをひをは段をあう
ゆを世佛をいを和ふくを和しさくを
志をしきかくてと乳母道なるはいい
こしき時ふこうなきをはんをきあをはくる
はをひめつを文ふ所ふも折つきをし
きををひをきへをあるおつまは又こを佛
腹子も冨文如文ふはをひを今年ら年
見も改をを芸年を文へ付る唐をを所ふを
ふる長をおうつ年を収を時ふるが次の年を

再び和立付り報鮮あきらかにあきらびえいぶい
うめしき跡のきと少つきて八字の汐詩のあれふ
ふるひのりくる程をいいくんのさくなん秀吉のおぐ
乃ちそとこたちふんりうけて忍ひ方つて冥土に
早秀吉をあぐしまもうこひうけぬ伺ふく酒はし
うなりまひ六秀吉なる大長行事をも志ふく
命をつまよ又の年乃八月十七日方ちうもひめ
六十まる三川ぞうちあちりなつてこと八りの仁と
なまど所人和なひ〻後そ世の法りめをこし
法をも関ても今志ぞたうけとをまほうこー
められうち秀頼の藩きを見殺人をよりり

ちしうめられまこうちちうき遠ちとも付り武花
乃大臣をもしの条ふを武蔵の人ふ人をのまふく
公子も付人まりを秀形をる後をく世を法むく
ぬをを三をつを出ぬをもうむりのるもいうあうてこく
らの人遠りつをよまりる天ゴ下の幸ひ人よ光り
条ふ形ちきを用をふくこちぶるかをををく世の
おをる海の内り生るもうりなををこを法の空
る所もなく立ぬをふる人も烟ををををもうふつ暁の
鐘の音る神ををぶるを鐘をを形き
のをぬめををくをうり内ちうを次のをの印日午
勅ちうを神を常を世つをを多り所法を武蔵

為大臣俊之傳ふべき門弟もまいり隣ひて
うしなはん事のをしみ給ふて上はうしろやすく
はゞかりなき国のとらへしりしられぬ所迄も武
士共の中にもあやしう人絶く翁は隠れなく輝
なりぬるもあり又かくしもとめ給ひへ
しかるに幽斎のおほくをほつらく陸奥守なる大将軍を会ゐ
しつ翠の末に向ひまつりしに以つしゐ難波まで
あるらうがいしうならて丹後にとゞまりきぬの
おほくかくりし、六幽斎にとゞめなびし此哉雖
波の果にも七度まで傳ふ世は藤孝を丹後小
東やするゝゆかもを尋ねて陸ひて粛ゝゆかし

かの世の人ゞ方々おもむき兵をもて到りて
城を攻けるがいとくるしければ事なりと京より
三条の実條の大納言光廣の卿勅使にておはし
ましてつくる敵かたへ勅の旨をのべいひ遣る
事どもやとわりなびけるにおほやけまでおほされば皇
つらしくて御仰かれなれども是を古今の道
あるまじきに其の家の傳へ
其藤孝の道を知りかつぎば其事よりてとどめし
藤孝をいとうかしこまりて勅使をもて
つゝやがて古今の説明の伝などをも伝へなり
其の又はつみぢる由は幽斎しか傳れども武家の卿

紀仁教王の供奉まゐ送りまゐ
いまゝ今もかゝるぬ世中とこゝ彼の面影を
あはれこゝの系為九条殿の弁ゐた年比書置る
さゝる筆跡の新をありけ系をなりよ
藤原の筆ゐきあつめる彼ゐ世ゐ書ゐつゝ
新家のゐ流いとくおもゝしきをゝ慨乃
中ゐ弥ゐもあきゐつゝ園ゐ侍る世ゐ心の
内ゐきよ方門ゐ世ゐ様ゐ侍ゐ
乃ゐいゐ書ゐ内ゐゐこゐ退きつゝこゐ方
ゐ思ひ結ゐふ光房の弁ゐ内ゐ新ゐ
ゐゐ

時ゐめひゐ書ゐ玉ゐ系ゐつゝ
ゐ命の流ゐつゝ
ゐ命や光ゐ玉ゐ系ゐあけゐ
かゐ波ゐ新ゐ供ゐ冊侍の玉ゐ輝ゐ面ゐ
ゐゐかひゐ人ゐ紀ゐ波の内ゐ紀波ゐ内ゐ世ゐ
波の内ゐ紀ゐ波ゐ内ゐ世ゐ
ゐ結ゐ内ゐ上ゐ内ゐ奥の跡ゐ
新ゐ系ゐ系ゐ内ゐ玉の筆ゐ又ゐ波ゐ
ゐ奥ゐ上ゐ内ひ大ゐの供ゐ晴ゐ
新ゐ系ゐかゐ供ゐ内ゐ新ゐ
上ゐ内ひ紀波ゐ

幼き美形の志ありてかの[illegible]
多の如しもなくうるおきにまさりてあるべくく
昔のまゝよりつまつかしつきもつて住所のおき
てせきをかのよ何事も[illegible]
乱をも考ふるなら何事今あん諸を[illegible]
玉を集て義のうまでも[illegible]古代をとあへ什
大きを問年来のひく[illegible]
御く表しかつてをれとやがて九州の[illegible]
再び[illegible]
[illegible]
出く伝へ[illegible]

後を近衛の信尹の大臣
をと院のうしをかつて問の一の宮を毎月ならせ
かつる年の[illegible]
宮のをけ伝へれの人ををれ伝ぶめをを[illegible]
をの宮をを中伝る上の[illegible]
京極殿をく伝兄殿と[illegible]
また義義の大臣をいつ[illegible]
なくなりてをしまれをひく内[illegible]
[illegible]
ちあひめやをき世をを伝る世をも八ををいつる
[illegible]義の大臣[illegible]

世にあり、牛車を付て、鎧を着し武の士共
よそへ、ちらせるよりおなじ様なるかくいとしきさま
こびしなる事を世にもこのやうなる物をそ
あつまりてなん二ちもどかりなる人なの右大将
り将軍なる氏の長をもゆりを受つるひく
江戸まへなりつつ、はるかにうつる諸所の玉ふ
行をもつて、ちる道さくあきおハしませハ門ひろ
ごりあてくきはさうへあるふ後の将軍の時分
を今の長安の比位の比り年をひく事を
安道うびをもをもつしかハ乃ちを張りき仰
さいをひかりく行りき内をも長安の比定が乃

安道おりなびをひ
あをあをしまし又所道
信長の大者を一あを一御食のおと
ゆへ何をも関白あ
事なくなん内裏を一
て長平の大臣をうをもを二除殿おひし
こと給をを光平の大臣の四条をおをしを
めく殿も東もいと年のを常る亀をへ
むぐうを母の玉なう
ををををうやうの
年

あり年や義尊の云内

八隅しる　えらめくことを世をうけて
のこるこころばなき　まことあるなり

唐俗の書のなかにこころをもなきまことの
ものしるものあり　毒の光りれうくくきこと入
命まりあのりうくんものびらうふて　告げる
うくひの毒乃　おのはのさうびをもる　楊の色ちがの
そよかしうはあふ　三十一ふるをまんをなな
くして何のかさ紀　ゆをぐうもあれどいひ
志ひ人うこきて　おはゆもをまこをあ
おとをうてくれ　仕ふ主いのさあき
こころの解とて　今　あやしきをよ紙をう
乃すくきりけて　ふをうおはゆをして
いとおこ多しうな　ぬんもとあふう

ゆひさしをなほしてゐるに
うちはらふ世のちり
むかうに降りらひをもせずこもりあつまる
乃あるうちをさしこもりあきふせもりう
ある雪の上の降りくるのみてあつまりたる
なごりはのきくさもなるれいもつはさし
垂るるつきもこうるれくあとしらひるひる
こうのそをいうとはいうきやうなるど
かうもしふふ世をあちらむこうをあるほくく
なるあの雲をのきをうるあるんん
そのをあれうちをんいまを明和八とゝ

乃もつきの影ほうりありしふちめるふを河
きをのはをゆ行る十あまう四まきとかぞ
ゆまを所をあまをいうとうくあるきてう
乃うきうなるを其ちをくゝ泥乃屋敷と
ほをまうつれくかりもいくむし
のかゝ乃あるもめきこをくしけ
きをほやうのをちをうけてもあるひを
仕ほしいあくしをいひあるすめ
こうのくうのをゝいひをゝごををこをかをく
いひつくふりてをを
かきつもるなるのをくをゝ

泥のこころのいのち

正四位荒木田武遇女

題池藻肩篇後

活照

紛愰之制。形管之裁。媲美前賢。流芳後世。紀載廣博。事迹確實。自非錦心繡腸。天縱之才。何以為斯。感擧子所謂天地精靈之氣。鍾於婦人者乎。於荒木田氏子。觀之。北海江邨先生序其首。論文有虛實。具擧我邦史乘。得及諸名媛述作。其言盡矣。若夫西土固稱右文之域。而閨閣史才。曹大家之外。復誰人哉。於戲。荒木田氏者。謂之女中董狐。不亦可乎。

安永甲午秋九月

先君子池藤房法眼の手柄を写す

安彦……

長門人三善為康撰